

山口県立大学 郷土文学資料センターだより

国木田独歩生誕 150 年記念プロジェクト

独歩の描いた風景を私たち自身の目でとらえ返し、
独歩が述べた思いに照らして私たちの思いを確かめる

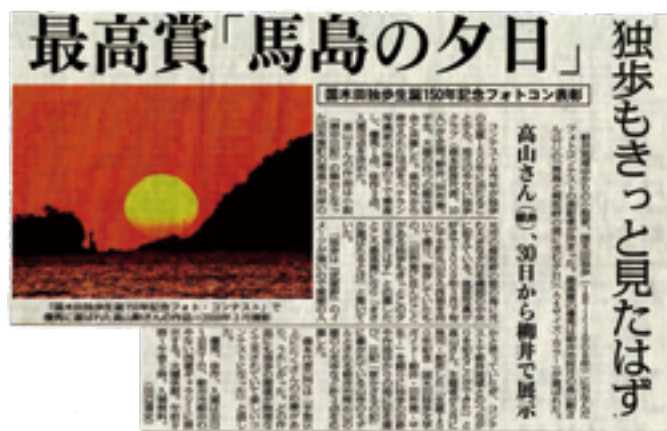
森本政彦 (やない独歩クラブ・代表)

私たちが住む柳井市とその近隣一帯には、国木田独歩に関わる旧蹟や記念碑や名作のロケーションなどが30箇所近く存在します。これほどの集中に恵まれたのは、独歩自身が青春の一時期をこの地の村落山野で生活し、恋慕し、自然観照し、読書し、思考したからですが、さらにそのことを、この地の人々が語り伝え、記録し、愛読し、顕彰してきた結果でもあります。私たちはこうした先人たちのひそみに倣って独歩作品を読み合う会をつづけつつ、僭越不遜を省みず、生誕150年を好機として以下の催し事に取り組んでいます。

☆ガイド冊子の刊行 『生誕150年記念 国木田独歩文学ガイド—柳井・田布施・平生—』の表題で、この地域の独歩ゆかりの14地点について、アクセス・現地写真・関連作品原文・解説を掲載し、希望者に無料配布中です。

☆読後エッセイ・コンテスト 「独歩のここが面白い!」をテーマに、独歩文学の魅力を1,000字以内にまとめる。優秀1編、佳作2編を表彰。全国から21編の応募があり、選考結果を2021年8月30日(独歩誕生日)の山口新聞紙上に発表しました。

☆フォト・コンテスト 「独歩青春の旧蹟、名作ロケーション、作品心象を写そう!」。優秀1点、佳作3点を表彰。県内外から58点が寄せられた。結果は2021年8月26日の周南新報紙上に発表され、応募全作品の展示会を9月30日から10月31日まで、やない西蔵(柳井市柳井)で開催しました。



フォト・コンテストについて報じる山口新聞 2021年9月15日

☆朗読と講演 「独歩文学との新たな出会いのために」—コロナ禍で延期となっていたイベントを再起動します。

日時: 2022年2月27日(日)12時30分開場/会場: アクティブやない(柳井市柳井) 入場無料・先着順定員312名様

出演: 独歩朗読セレクション=『帰去来』堀永州平さん/『置土産』瀬川嘉さん/『武蔵野』中島歩さん(中島さんは俳優で国木田独歩の玄孫、動画参加)

講演=高橋源一郎さん:「最初の小説家」

高橋さんからのメッセージ—〈国木田独歩は日本近代文学の開祖の一人というより、この国で「最初の小説家」の名こそふさわしいと思います。亡くなってから百年以上たち、大きく変わってしまったこの国と小説、その未来のために、もう一度、独歩を読み返す時期が来たのです。〉

こうした幾つかの催し事で私たち目ざしているのは、読み方を豊かにすることです。当代最前線の小説家が近代日本最初の小説家について何を語るのか、そこにどんなエキサイティングな読み方が展開されるのか—私たちは大いなる期待をもって、このプロジェクトのメイン・イベントを待ちのぞんでいるところです。(令和4年1月21日)



多彩な出会いの創出の場としての郷土文学資料センター

安 光 裕 子 (郷土文学資料センター・研究員)

昭和61(1986)年5月15日に、郷土文学資料センターの開所式が挙行されました。「郷土文学資料センター」の看板(故柏谷静香先生の揮毫)は、初代所長の故上野サチ子先生と故中山清次学長によって、報道各社のフラッシュを浴びながら、附属図書館入口に厳かに掲げられました。その光景をみた私は、「これから郷土文学に光がそそぐ!!」と心が弾みました。

何といっても一番の思い出は、センター恒例の事業でもありましたが、夏休みに学生と教員が県内を巡りながら行った、国語学国文関係資料の所在調査です。清風文庫(下関市)や萩市立萩図書館、忌宮神社(下関市)、阿川八幡宮(下関市)、伊保庄村上文庫(柳井市)など各地を巡って詳細に調査を行いました。

なかでも、熊本守雄所長(当時)、故清原万里先生、安光の車3台を連ねて十数名で、泊りがけでの調査は鮮明に記憶しています。阿川八幡宮の調査にあたって、故伊藤忠芳宮司のご厚意で、拝殿の床に八幡宮所蔵の古文書類を広げて、一冊ごとに細目調査カードに採録する作業をひたすら行いました。「(1)外題(簽・直)(原・後)(左・中・他)」「(2)所蔵者」など。貴重な資料に触れる喜びと、地道な作業が研究という作品を創り上げる基礎となっていることに気づかされる機会となりました。調査の合間に、福田百合子先生をはじめ、みんなで阿川海水浴場に行って泳いだり、水遊びをしたりした後、焼き肉パーティーに興じたことは、忘れ得ぬ一コマです。



阿川海水浴場にて(1990.7.17)

また、春・夏の休みには、熊本所長、武市眞弘先生、野口義廣先生とともに、清風文庫(三隅公民館所蔵)の調査を行いました。まずは、段ボールから資料を取り出したり、箱の詰め替えをしたり、掃除をしたりと、調査をする前の儀式を済ませて、細目調査カードに採録する作業を黙々と行いました。無言での作業の合間の3時のおやつはとらやの羊羹、また近くの食堂で食べたうどん定食の味は、今でも覚えています。

郷土文学資料センターを通じて、故古川薫氏、故和田健氏、故清永唯夫氏、高樹のぶ子氏など、多くの人との出会いがありました。とりわけ和田先生とは懇意にさせていただきました。ご自宅に何うと、玄関で出迎えてくださる先生は、アロハシャツを着た白髪のジェントルマン、畳の間に案内され待っていると、奥様がそろりそろりと、ハワイから取り寄せたコーヒーとケーキ、お水を運んでくださいました。それをいただくのが至福の時。和田先生と奥様の若かりし頃のお話などを聞くのが楽しみで、思わず用事を忘れそうになることが幾度となくありました。現在、加藤禎行先生が中心となって、和田健関係資料の山口市との共同研究が進んでおり、令和5(2023)年度に山口県立山口図書館で公表される成果を、今から心待ちにしています。

さらに、『広辞苑』の編者新村出との出会いも私の研究に色を添えてくれました。新村出のお孫さんの恭氏との出会い、戦禍に見舞われながらも残り続けた出の原稿との出会い(『センターだより』第34号)は、私の郷土文学への世界を広げてくれました。

私にとって今年度は退職を迎え、研究生活の一段落となる年であります。郷土文学資料センターは、多くの出会いを創出してくれた、かけがえのない場です。これからも、郷土文学資料センターは、稲田秀雄先生を中心に、山口県の郷土文学、文化を牽引する、学術研究機関として、さらなる発展を期待しております。



俳人・地橙孫と『地橙孫写真集』の上梓

兼 崎 人 士 (兼崎地橙孫顕彰会・会長)

このたび地橙孫顕彰会では、清明の俳人^{かねざき ちとうそん}“兼崎地橙孫”生誕130周年を記念して、作品等写真を収載した『地橙孫写真集』を発刊いたしました。地橙孫は河東碧梧桐の高弟として俳句道に精進し加えて、最後の六朝書・書道家として多くの書を遺しています。

当顕彰会は、没後50年にあたる平成19年(2007)9月3日に周南地区の有志によって創立され、資料展や機関紙“地橙孫新聞”の発行、さらには句碑の建立、地橙孫命日の「芙蓉忌」開催など、地橙孫顕彰に繋がる諸活動を進めてきました。

出版物としては、地橙孫百句抄『花芙蓉』を平成20年(2008)に発刊しました。続いて平成24年(2012)に、地橙孫が書いた5篇の自伝的小説をまとめて『俳人兼崎地橙孫自伝抄』として出版しました。

そして、顕彰会の出版物第3弾として発刊された本書は、最後の六朝書家であった地橙孫の俳句と書を、後世に遺すため多くの写真を中心に収載したものです。清明句とともに、中村不折直伝の六朝書を多くの方々に知って頂ければと、願っております。あわせて、地橙孫家族写真なども紹介しましたので、家族思いであった地橙孫の面影を本写真集から偲んで頂ければ望外の喜びです。



清明の俳人・地橙孫(ちとうそん)

山口市で生まれた地橙孫は、昭和20年(1945)関門空襲で罹災するまでの20年あまり、下関で永く弁護士として活躍し、山口県弁護士会会長も務めました。戦後は実家のある故郷・徳山へ帰り引き続き弁護士を続けながら俳句道に精進し、明治、大正、昭和期俳壇の鬼才として活躍しました。

地橙孫の俳歴については当初は新傾向俳句で、荻原井泉水が主宰した「層雲」から「海紅」、そして黒田忠次郎らとの「生活派」を経て「清明集」となり、定型に戻っております。晩年は気品のある清明句を目指し、辞世の句“今日の日を包みて了へぬ花芙蓉”など多くの俳句を遺しました。



防府市護国寺 “俳人種田山頭火之墓”
地橙孫が六朝書で揮毫

俳人・地橙孫を語るうえで忘れてならないのは、中村不折直伝の六朝書家として、そして龍眠会の同人として活躍した事です。その作品は、今なお多くの人を魅了しています。

防府市護国寺にある種田山頭火の墓標は、地橙孫が六朝書で揮毫したものです。

嫡男の兼崎香澄さんは生前、地橙孫の思い出を次のように述懐していました。

『六朝書の本質は、芸術性ですが、現在この六朝をやる人はおりません。父は最後の六朝書家と言えるでしょう。徳山に帰郷後も「今のうちに書いておかねば、六朝もなくなるだろう。こうしてせせせと書いておくと、誰かが伝えてくれるであろう」と言っていました。毎年300枚出していた年賀状を1枚ずつ異なる句を六朝で書いたのもその気持ちの現れでしょう。』

地橙孫にとって熊本は、第二のふるさとと言えるでしょう。青春時代に「五高(第五高等学校)」で学んでいます。教授陣としては、嘉納治五郎(第3代校長)、夏目漱石、小泉八雲などが教鞭をとっており、卒業生としては、池田勇人、佐藤栄作の総理大臣や寺田寅彦などがいます。校風は孔子の語で

ある、意志が強く不屈であり人柄が飾りけのない、「剛毅朴訥（ごうきぼくとつ）」でした。

大正5年の春、種田山頭火が生活に困窮して熊本の地橙孫を頼った時、彼は卒業を目前にした学生でしたが、奔走して中心街（現：下通り商店街）に家を借りて古書店を開かせ、山頭火は家族を呼び寄せています。学生でありながら短期間で対処できたのも、地橙孫の人柄と、校風「剛毅朴訥」の心意気、それと彼が学校や学生寮の3年間で培った様々な人たちとの強い絆があったからこそ可能であったと推察されます。個人の山頭火を支援した多くの人たちがいますが、山頭火が最も困窮したときに家族全部を支援したのは地橙孫です。

“俳句”と“書”そして“ふるさと”“人”を、こよなく愛した地橙孫。人生とは、まさに出会いです。多くの方々のご尽力により完成したこの写真集が、ふるさとの文化を偲ぶよすがとなり、文化振興に寄与する一助になれば幸いです。



地橙孫句碑「今日の日を包みて了へぬ花芙蓉」

寄贈図書（2021年5月～2021年11月）

明日を紡ぐ大地の会上演台本『構成詩劇 春さきの風－詩人・中野重治の世界』、河村正浩『句集 なんとかなる』、田村梯夫・平山智昭『戦国歴史秘話 長州初代藩主毛利秀就公総括版－誕生の真実追及－』、野村邦子『句文集 わすれ草』

寄贈雑誌（2021年5月～2021年11月）

『大内文化探訪』第39号（大内文化探訪会）、『其桃』第916～919号（「其桃」発行所）、『神戸女子大学古典芸能センター紀要』第15号（神戸女子大学古典芸能研究センター）、『佐波の里』第49号（防府史談会）、『秋芳町地方文化研究』第57号（秋芳町地方文化研究会）、『新紫南』創刊号、『大地通信』第40号（明日を紡ぐ大地の会）、『中原中也研究』第26号（中原中也の会）、『颯』第117～118号（颯文学会）、『ふるさと通信 きずな』第13号（ふるさと紀行編集部）、『文芸山口』第357～360号（山口文芸懇話会）、『やまなみ』第38号（やまなみの会）、『山彦』第164～166号（山彦発行所）

編集後記

本号では、やない独歩クラブ代表の森本政彦氏、兼崎地橙孫顕彰会・会長の兼崎人士氏にご寄稿いただきました。また、本年度で退任する研究員の安光裕子氏にも、郷土文学資料センターでの活動を振り返っていただきました。当初、兼崎地橙孫顕彰会事務局の森谷京子氏に原稿執筆を依頼したのですが、昨年10月に逝去された旨ご連絡をいただいたうえ、会長みずから原稿をお寄せいただきました。事務局として活動を支えられた森谷氏に哀悼の意を表します。（菱岡憲司）



■編集発行：山口県立大学郷土文学資料センター（〒753-8502 山口市桜畠3-2-1）
TEL. (083) 928-0211 FAX. (083) 928-2251
■発行日：2022（令和4）年2月1日